

大泉の牧野富太郎邸の住居空間とその暮らしについて

伊藤 千恵

練馬区立牧野記念庭園

はじめに

植物分類学者牧野富太郎博士(1862–1957)(以下、「博士」と略す)は、生涯に発見や命名をした植物が1,500種以上に及び、日本の植物分類学の基礎を築いた一人とされる。博士が1926年から逝去するまで過ごした大泉の住居と庭は、現在練馬区立牧野記念庭園(以下、同園)となり、博士の業績を後世に伝えるための施設となっている。2016年、大泉転居90周年を記念した企画展を開催するにあたり、博士の親族と知人から当時の住居に関する証言を伺う機会が得られた。また、同園には、博士の親族が所蔵する写真資料が収蔵されており、その中には住居での博士の姿を撮影した写真も含まれている。本論では、資料や証言に基づき、博士が生涯を過ごした大泉の住居の間取りと日常生活の一端を明らかにし解説する。

1. 方法

同園開園当時の平面図及び書庫の平面図(練馬区公園緑地課 2008)、書斎部分(2階)の図面(楠瀬 1939)、親族などの証言、当時の建具や畳の一般的な寸法や、家の外観や部屋を写した写真をもとに間取り図を作成した。また、親族などへの聞き取りの際には、博士の部屋の使い方や暮らしぶりについても尋ねた。

2. 結果と考察

(1) 大泉に建設された牧野博士の住居の概要

牧野家の敷地内の建物の配置を図1に、住居などが建設された年を表1に示す。大泉に博士が転居するきっかけは関東大震災であり、標本を火災その他の災害から護るためには、郊外の方が安全であると思ったことによる(牧野 1956)。そのため、震災から2年後の1926年に北豊島郡大泉村(現・同園所在地)に転居し、敷地内の北西に位置する場所に2階建ての一軒家(以下、旧住居)が建設された(図1)。しかし、その2年後の1928年には大泉への転居に尽力した妻・壽衛すえが他界する。妻

が亡くなった後は三女巳代みよ、四女玉代が博士の身の回りの世話をし、巳代、玉代が嫁ぐ頃には、長女香代、次女鶴代が博士の世話を引き継ぎ、同居するようになった。1941年には敷地南側に安達潮花ちようかの寄贈により牧野植物標品館が建設され、それを受けて同年12月2日に池永いけなが孟より池永植物研究所に収められていた標本約三十万点が返却された。1951年、旧住居の老朽化に伴い、敷地内の北東に位置する場所に平屋の新住居が建設された(図1)。その後、旧住居に隣接していた書庫を曳家により移動し、新住居と書庫の間に書斎ができた。書庫は蔵書の増加に伴い、書斎に書籍が入りきらなくなったために建設されたと考えられるが、建設された時期は不明である。以前あった位置は、空いている空間に限られることと、旧住居の茶の間や縁側からは見えなかったという親族の証言から、旧住居の北東側に位置していたと考えられる。

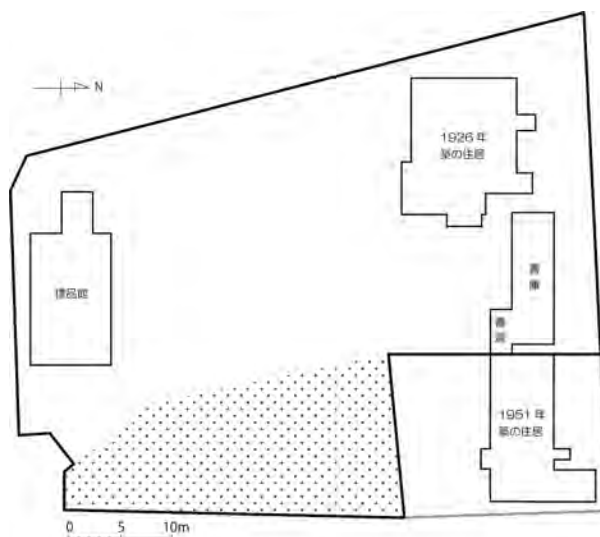


図1. 牧野家の敷地内の建物の平面図(博士晩年時、練馬区公園緑地課 2008をもとに作成)。黒い実線は現在の牧野記念庭園の敷地を示す。点描部分は畑で牧野家の管理外であった。

表1. 牧野博士の生涯と大泉の新旧住居に関する年表.

年	年齢	できごと
1923 (大正12) 年	61	9月1日, 東京渋谷にて関東大震災に遭う.
1926 (大正15) 年	64	5月3日, 東京府北豊島郡大泉村上土支田557に転居する.
1928 (昭和3) 年	66	2月23日, 妻・壽衛死去.
1941 (昭和16) 年	79	11月, 安達潮花の寄贈により牧野植物標本館が建てられる. 12月2日, 池長孟より標本が返還される.
1951 (昭和26) 年	89	8月23日, 新たな住居が建てられる.
1957 (昭和32) 年	94	1月18日, 博士逝去.

(2) 1926年建設の住居について

1926年に建設された旧住居は2階建てであった(図2). 1階部分は8畳部屋, 6畳部屋, 4畳半の茶の間, 女中部屋, 洋間, 書生部屋, などから構成され, 西側には南向きの広い縁側がとられた. 2階部分は1階部分の東側に建設され, 主に8畳と4畳半の部屋で構成されていた. また, 階段は玄関の横に設けられた(図3).



図2. 1926年に建設された旧住居の間取り.



図3. 1926年築の旧住居の外観 (1929年10月撮影, 個人蔵).

博士の書斎は2階の8畳と4畳半の部屋に設けられ, そこには研究に用いる多量の蔵書や標本が積み重なっていた(図4). 博士は自宅にいる時間の大半をこの書斎で過ご

し, 親族の証言によれば, 食事は1階の茶の間でとっていたが, 終わるとすぐに2階の書斎へ戻っていったという.



図4. 旧住居の2階の書斎 (1937年1月6日撮影, 個人蔵).

ただし, 来客対応や標本整理・閲覧の際に時折1階に降りることもあったと考えられる. 1階の8畳間は来客などの対応をする座敷として使用され, 床の間には博士直筆の掛け軸がかけられていた(図5). また, 縁側は図6の様子から標本を見るための場所としても使われていたことがわかる. さらに図7より, 廊下は標本を整理する場所として利用されていたことがわかる.



図5. 旧住居の座敷 (1937年1月撮影, 個人蔵).



図6. 旧住居の縁側 (1939年5月31日撮影, 個人蔵).



図7. 旧住居の廊下 (高知県立牧野植物園蔵).

しかし、2階に積まれた蔵書の重みが主な原因で、旧住居は老朽化が進行した。親族の証言によれば、書斎の床に穴が空き、さらには玄関までゆがむこととなったという(図8, 牧野1947)。このため、博士は1階の座敷として使われていた8畳間を新たな書斎として使用し(図9)、一日の多くをここで過ごすことになった。さらに、この頃になると、下宿する書生もいなくなったことから洋間と書生部屋も多くの荷物で溢れかえるようになったという。当時の自邸の様子について、牧野(1952)より抜粋する。



図8. 蔵書の重みで歪んだ旧住居の玄関 (牧野1947)。

「(前略)家の建てつけがすっかり狂ってしまって戸障子もろくに閉まらん始末ですよ。真冬でも廊下は開けっぱなし。風は吹き放題だし、雨漏りはするし、いやはや。(中略)天気の良い昼間は、もっぱらお天道さまと友だち。縁側に机と椅子を持ち出して、読み書きします。夜は十二時前に寝ることないんで「冷えはせぬか、寒くはないか」と家のものがうるさいほど心配するが、なにせ二十数年この家で鍛えられてたんで、そのわりに平気ですな。(後略)」

このようなことから1951年に、旧住居の東側に新住居が増設されることになった。



図9. 旧住居の1階の書斎 (1950年4月2日撮影, 個人蔵)。

(3) 1951年建設の新住居について

新住居は、1951年8月23日に、次女鶴代を所有者として登記が行われている。新住居は東西に長い平屋で、旧住居と同様、玄関より西側の部分には縁側が南向きに広くとられた(図10, 11, 12)。この縁側は旧住居と同様に、標本などを見たり知人と対話したりする場所としても使われた(図13)。また、6畳間が茶の間で家族と日常の食事をとる空間、8畳間が座敷で客人をもてなす空間であった。



図10. 新住居の玄関にて撮影された博士と次女鶴代 (1953年撮影, 個人蔵)。



図 11. 1951 年に建てられた新住居の間取り.



図 12. 庭から望む牧野富太郎邸 (1955 年撮影, 個人蔵). 左から 1926 年築の住居, 書庫と書齋, 1951 年築の住居.



図 13. 新住居の縁側 (個人蔵).

当初, 新住居には書齋と書庫がなく不便であったため, 博士はしばらくの間旧住居で過ごすことが多かったとい

う. 後に, 書庫を新住居の西側につながるよう移動させ, 住居と書庫の間に書齋を増設し, 直接往来ができるようにしたことで, ようやく博士は新居へ移ってきたという. 書庫は, 現在も一部 (8 畳) が牧野記念庭園内で書齋とともに保存されている. 同様のサイズの空間があると 3 つ連なり, 全部で 4 部屋分の空間に書籍が納められていた (図 14). その書庫の隣に造られた書齋は, 新住居の縁側とつながっており, 博士は縁側から入ってすぐの場所に座り, 机を縦長に使用して, 原稿執筆などにあたっていた (図 15). そして, これまでと同様一日の大半の時間をこの書齋で過ごしていた.



図 14. 書庫 (1949 年撮影, 個人蔵).



図 15. 新住居の書齋 (1953 年 9 月 1 日撮影, 個人蔵).

しかし, 1954 年 12 月に肺炎を患ってからは 8 畳間の座敷で病床に臥すようになる (図 16). 博士は原稿の訂正をしたり尋ねられた植物の同定をしたりするなど,

病床でも仕事を続けていたというが、1957年1月に植物の研究に捧げた生涯の幕を閉じる。



図 16. 新住居の座敷 (1955年3月撮影, 個人蔵).

おわりに

本論では、博士が生涯を過ごした大泉の住居の間取りと日常生活の一端について明らかにした。旧住居は2階建てであり、1926年に建設されたが、2階部分に置かれた蔵書の重みで歪みが生じ、1951年に平屋の新住居を建設することになった。旧住居では、博士は大半の時間を2階の書斎で過ごしていたが、一方で標本の作製や閲覧、来客対応のために1階に降りてくることもあった。新住居が建設された後も、博士は大半の時間を書斎で過ごしたが、病床に臥してからは座敷で過ごすこととなった。また、書斎は大泉に転居してから、3つの部屋を使っていた変遷が明らかとなった。実は今回の調査で、牧野植物標品館が建設される前に標本製作室が存在していたことが判明したものの、詳細は明らかにするこ

とができなかった。今後の課題として、それが敷地内のどこであったのか、その間取りなどを調査することによって、博士が大泉の住居でどのように標本を作製し整理していたのかが明らかになるものと思われる。

謝辞

本論の執筆にあたり、牧野^{かずおき}一淳氏には当時の住居空間について証言していただくとともに、写真をご提供いただきました。牧野美智江氏、芹沢東氏には当時の様子を証言していただきました。高知県立牧野植物園の藤川和美氏、村上有美氏には写真提供の際に大変お世話になりました。練馬区立牧野記念庭園の田中純子氏、牧野由美子氏、田村依子氏には住居空間を調べる過程で数々のご助言をいただきました。また、編集者・査読者の方には原稿の改善のための有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

- 楠瀬日年. 1939. 繇條書屋 牧野富太郎博士の書斎. 洗硯 1(2): 42-52.
- 牧野富太郎. 1947. 牧野植物随筆. 224 pp. 鎌倉書房. 東京.
- 牧野富太郎. 1952. お天道さまと晝間はお友だち. 家庭雑誌 主婦と生活 7: 294.
- 牧野富太郎. 1956. 牧野富太郎自叙伝. 272 pp. 長嶋書房. 東京.
- 練馬区公園緑地課. 2008. 花在ればこそ吾れも在り 牧野記念庭園開園 50 周年. 188 pp. パレード. 大阪.